

立

杭の工房は、そのほとんどが密集していると
言っているのだが、目指した窯元は一軒だけ大
きく外れていた。まずはそこからルートを決めたも
のの、結果からいうと、そこにたどり着くまでに結構
な時間と体力を要したため、ほかの推薦窯元を諦める
ことになった。

長い長い坂道を汗だくになって上った末、また息も
整わぬまま展示室に入る。正面に置かれたスープカッ
プに目がとまった。形も色も少し変わっていて、とん
がったデザインに思えた。こういうのほしかったのだ
と思った。そばにいた職人さんに言っ、二つ求め
た。じゃんけんもなしで二割引だった。ここに来てよ
かった、と思った。

二軒続けてスープカップを求めたのは、退職してか
らというものの毎日スープづくりをしているからであ
る。老父の食事を作るための思いつきだった。

父は一人暮らしになってから、亡母のあの味やらこ
の味やらの復活に余念がなく、顔を出すとしきりと食
べさせたがった。

「どげだあかな。ばばが作つてごすよつたが。そがか
れか？」

確かに、いつたい何日分の塩分を摂らせるのか、と
思うようなときもあったが、再現率のかなり高いのも

あつて、それを言うとうれしそうにしていた。

料理を楽しんでいるように見えた父だったが、亡く
なる少し前からスーパーで買った惣菜がトレーのまま
テーブルの上に置かれるようになった。

「めんどくさくてのお。」

としよんぼりして言うのを気にしつつも、ぼくは仕事
を理由に見て見ぬふりを続けていた。

三月に定年退職した。レシピ本を買い、スープとご
飯でほとんどの栄養が足りると知り、これならできそ
うだと思った。その途端、退職を区切りに、との言い
訳がましさを叱るみたいに、父は亡くなってしまった
のだった。

もともとの目的は失ったのだが、妻と自分のために
作るうちにいつしか習慣になった。そうなるも欲も出
て、器も選んでみたくなった。

旅を終えて帰宅すると、早速丹波焼スープカップ二
組を食器棚に並べた。ん？、そういうことか。途端に
理解できた。まったく合わない。色もデザインもどこ
がいいと思つたのだから思い出せない。自分が求めてい
たのはこれだ、なんて、自転車で坂道を上り続けてく
たびれた頭がその対価を求めただけのことだった。皮
肉なもので、最初の窯元でさきつと選んだカップは妻
も気に入って、毎日食卓に並ぶようになった。

木幡智恵美

義母の病氣(3)

泌尿器科の先生は、義母の身体全体、そして肝心の膀胱の腫瘍についての説明が終わる
と、今後の治療について話された。

「まずは痛みの元を取らなくてははいけません。全摘するのが一番いいのですが、お歳のこと
を考えて、内視鏡で腫瘍部分だけを取ります。その後、再発防止に一月かけて、少量ずつ
放射線を当てていきます」

聞きながら、耳を疑った。えつ、内視鏡で腫瘍切除。百歳の身体に果敢に挑戦するという
のか。胸の中のざわめきを抑えつつ先生の話に耳を向ける。当の先生は平然とした表情のま
ま続ける。「今日が月曜日ですから」と、予定表を確認し、「木曜日に手術をしましょう」
と言われた。しばらく待合にいと、看護師さんが入院手続きの用紙を持ってこられた。

ここはコロナ感染者受け入れ病院だ。病棟に上がる付き添いは一人だけ。入院手続きに
は夫が付き添い、帰って荷物を準備して届けるのは私と分担することにした。夫が義母の車
椅子を押して看護師と病棟に向かい、入り口付近で夫を待つ。その間に正面玄関に入ってす
ぐのところ、コロナ対応のために設置された受付に貼られている紙を読んだ。基本面会は禁
止、着替えなどの搬入、洗濯物取りなどは、午後三時から、十五分以内で可となっている。

インフルエンザ後の肺炎で入院したのは一年半前。やはりこの病院だった。入院に必要な
道具を持つて行った帰り、体中から力が抜け、雲の上を歩いているような感じだったことを
思い出す。仕事帰りの息子に、「お袋、どうした」と聞かれたくらいだ。寝たきりの義母の
世話に費やした時間がばつと無くなってしまったことによる喪失感のようなものだった。け
れども、今回はあの時とは違う。先生に示された義母の全身像で、私にはもうどうしようも
ないことが分かった。体温計や血圧計で対応できはしない。義母の痛み、苦しみは、もはや
私が背負いきれるレベルでなかった。医師や看護師に委ねることでは、義母は救われない
のだ。しかも、ここに至るまでが長かった。正直疲れた。ドンドンの音にピリピリする毎
日、家族のとげとげとした雰囲気、それらから解放される。義母には申し訳ないが、胸の中に
溜まりにたまつた重しが取り除かれるという思いが勝っていた。



30代フリーター やあ、ジイさん。

「マウントを取る」という言い方をネット上でよく見かけるようになった。いつも他人より優位に立つことを求め、それを隠そうとしない人たちが増えているように感じる。

年金生活者 資本主義の高度化が加速する富の稀少性の縮減が、国家の権力の一部を個人に分散させ、それを手にした諸個人が相応の処遇を求めるようになった結果だ。

それが新たな「万人の万人に対する戦い」を引き起こしている。ふだんは表からは見えにくい冷戦として戦われていて、ときどき熱い戦いとなって噴出する。先日、次のような女性のツイートを見かけた。

「また唐突にぶつかってくる男性(白髪が。地下鉄で手すりに沿って立っていると、わざわざ私の方に立ち寄り、どんつとぶつかってきた。ビクツとしていると、男性は元の場所に戻り、開いたドアから降りて行った…」

ぶつかった男性の精神状態はわからない。それなら、いつでも、どこでも頭をもたげてくるうぬぼれを、モグラたたきのようにたたき続けるしかない。たとえば、他人を疑ったり、責めたりしている自分に気がついたら、そんな自分を疑い、責めてみる。

30代 モグラをうまくたたきコツはあのかい。年金 自分の弱い心を守るために、ふだん試みていることをいくつか並べてみる。

【手作業をする】包丁で野菜を切る。洗い物をする。洗濯物をたたむ……これらの作業が、妄想的、強迫的、抑鬱的になっていった精神を自然のほうへ押し戻す。

【礼を言う】憎んでいる相手を思い出して気分が悪くなったら、頭の中でその相手の名を呼び「ありがとうございませす」と唱えてみる。言葉は心のアングルを決める働きがあるから、憎しみのアングルが一時的、部分的にせよ感謝のアングルに替わる。

【なるべく迷う】迷ったぶんだけ後悔

ない。「また」とあるから、以前にも同じような経験をしたと受け取れる。だとしたら「万人の万人に対する冷戦」が熱戦に転化した事例と考えることができる。

30代 難儀な時代になった。逆張りして謙虚さを目指すほうが身のためかもしれない。

年金 謙虚になろうと努力しだすと、こんなに努力している俺はあいつよりも、どこでも頭をもたげてくる。たぶん人はうぬぼれなしには生きられないようにできている。それはやっかいで、ときに危険なことだ。だからこそ謙虚さを目指さざるを得ないと自身は考えている。それは神の教えに従いたいからとか、倫理的に振る舞いたいからとか、また人づきあいを円滑にしたいからとか、といった理由からではない。謙虚さを欠くと、心が窮屈

しない。迷いは事前の後悔であり、後悔は事後の迷いだ。迷いは後悔より痛みが少ない。

【人を見下さない】だれであれ他人を自分より格下だと思ふのは危険なことだ。相手が自分より優位に立つ可能性はいつでもあり、そうなったときの衝撃は、対等あるいは格上と思っていた相手の場合よりはるかに大きい。

【今日1日】アルコール依存症者が酒を飲まないために自分に言い聞かせる言葉だ。今日1日だけ飲まないでおこ

になり、苦痛を感じたり、つまずいたりする恐れがあるからだ。爪先立って背伸びすると、足が痛くなったり、よろけて転んだりするように。私はそれを怖がっている。

30代 人はなぜうぬぼれるんだ。

年金 人間は欠如を抱えた存在として生まれてくる。それを埋めようとしてうぬぼれる。欠如とは母胎から分離したことそれ自体だ。母子はそれまでひとつの宇宙を形成する一体の存在、欠けるところのない完備した存在だった。

30代 で、どうやって謙虚になるんだ。

年金 信仰はうぬぼれを抑える。絶対的な存在を想定することによって、おのれを相対化し、うぬぼれをくじくことができるからだ。おのれを他力にすがらない凡夫と考えた親鸞はそれを実行した。無神論者を自称する私はその道を選ぶことができない。無神論は神の助けなしに生きられると考えている点でもとと謙虚さを欠いている。

う、飲むなら明日にしよう、と。これはきつい目に遭ったときにも応用できる。苦しいのは今日1日だけ、と。実際にはそうならないとしても、少し気持ちが軽くなり、しのぎやすくなる。

【死を思う】「あれどうしよう、これどうしよう」と思っているとき「どうせ死ぬんだから」と考えると「どうでもいいかも」という気がしてきて、少し気が楽になる。これは老いることの利点のひとつだ。

【感謝と敬意】嫌いな相手も含めてすべての他者に対して感謝と敬意を抱くことができるれば人は無敵となる。そんな人物を見たことがないから、これはあくまでも理想だ。だが、その理想を手離したとき、私の精神はダツチロールを始めるだろう。

こうやって並べてみると、高慢を避け、謙虚になるのが自分の心を守る方法になり得ることに気づく。高慢を駆動力にして様々なことをこなす人物もいるに違いない。私にはそれは危険だ。

ニュース日記 811
中村 礼治

精神衛生のために